



松山の都市デザイン

松山市 都市デザイン課

平成 27 年 3 月

<目 次>

第1章 策定の背景	1
□策定の背景・課題	
第2章 松山の都市としての経緯と特徴	3
□松山市の都市形成の歴史	
□松山市の都市デザインの取り組み	
第3章 都市デザインの目標とテーマ	5
□都市デザインの目標	
□松山の特色と個性	
□都市デザインのテーマ	
第4章 都市デザインの方向性	11
□基本的な考え方	
□都市デザインの方向性 3つの視点から	
第5章 都市デザインの手法	17
□都市デザインへの7つのアプローチ	
第6章 民学公連携による都市デザインの推進	25
□都市デザインを進める民学公連携の体制や仕組みなど	

第1章 策定の背景

松山市は、江戸時代初期の城下町形成を契機に、愛媛県の中央部を圏域とする四国最大の中核都市として発展してきました。しかし、人口減少社会の到来、急速な少子高齢化の進行、環境問題の深刻化、経済のグローバル化、地球規模での情報化の進展など、松山市のまちづくりを取り巻く環境は大きく変化しており、地域間の競争が激化する中で持続可能な都市であるためには、魅力ある都市を目指して、まちづくりの課題を改めて整理し、対応していくことが求められます。

1

時代の流れに適応しながらも一貫性を持ち続けるまちづくり

都市は、様々な時代におけるまちづくりが積み重ねられ、塗り替えられることにより変化していくものです。しかし、それぞれの地域の歴史や伝統が培ってきたものの良さを生かしながら発展していかななくては、その地域らしい魅力を発揮していくことはできません。

松山市では、「人が集い 笑顔が広がる 幸せ実感都市まつやま」をまちづくりの将来都市像として掲げ、松山ならではの地域固有の資源を活用した個性あるまちづくりを進めており、今後もその良さを継承しながら新しいまちづくりへと挑戦していくことが期待されます。

2

多様な主体の間での価値観の共有

まちづくりは、景観づくりや公共施設の整備、民間建築物の整備、拠点の開発、地域単位の環境づくりなど、その分野も様々で、かつ多様な主体が関わります。方向性を共有せず、各々が勝手に取り組めば、効果が発揮されないばかりか相矛盾するものとなりかねません。魅力ある都市を目指すには、まちづくりの価値観や目指すべき将来の姿を共有し、多様な主体による取組を効果的に連携させていく必要があります。

3

民・学・公が連携したまちづくり

かつて、まちづくりは行政が中心となって取り組まれてきました。しかし、住民のニーズが多様化し、財政的な制約が強まる中、もはや行政だけのまちづくりには限界があります。地域住民等の民間のまちづくり主体も成長しており、今後は、「民」と「公」、そして地域に根差した教育研究機関等の「学」が連携しながら地域の創意工夫を生かしたまちづくりを進めることが求められます。

4

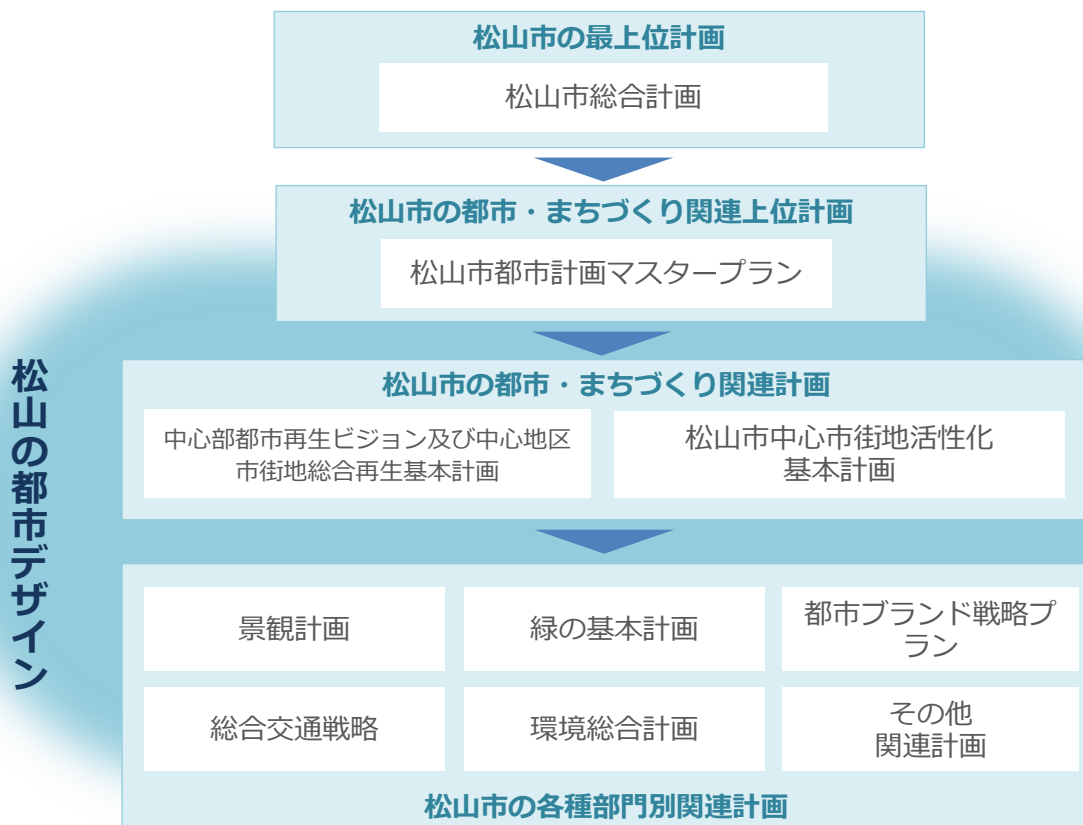
地域それぞれの個性や特性を活かした都市づくり

松山市は平成 17 年に北条市や中島町と合併し、市域も大変広くなりました。同じ松山市の中に、お城下を中心とした市の中心部もあれば、郊外、中山間部、また北条のような歴史のある地域、さらに中島などの島嶼部まで、特性が異なる多様な地域があります。それぞれの地域の特性を活かし、その多様性を豊かさへとつなげるまちづくりが求められます。

「松山の都市デザイン」は、こうした背景を踏まえ、今後の松山市の景観づくりやまちづくりで、大切にすべき価値やめざす都市の姿、その実現に向けての方策等、「民」「学」「公」が連携しながら取り組んでいく上で、認識を共有すべき内容を示すものです。

計画としての位置づけ

「松山の都市デザイン」は、松山市の都市・まちづくりの計画とともに、魅力ある都市を目指すため、以下のように多分野を横断して都市としての価値や目指すべき将来像を共有するための方向性を示すものです。



第2章 松山の都市としての経緯と特徴

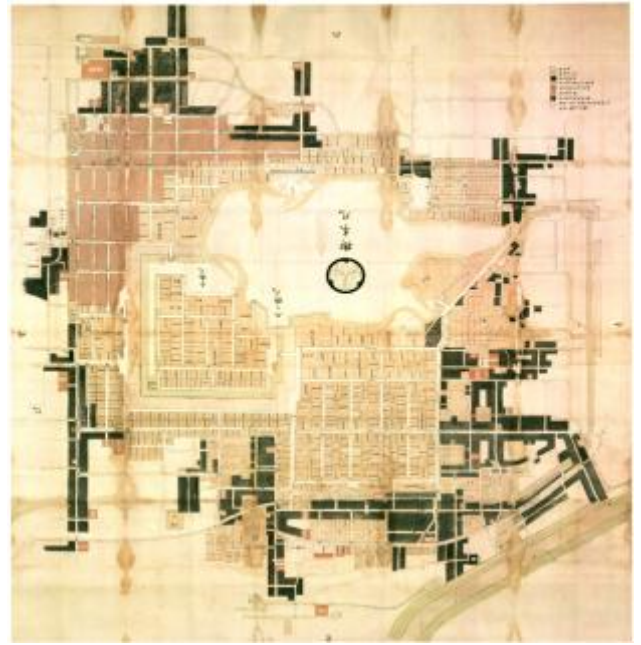
1 松山市の都市形成の歴史

●加藤嘉明による松山城の築城、城下町の形成

松山のまちづくりは、1602年（慶長7年）、加藤嘉明が、道後平野（松山平野）の中心にある勝山に築城を開始し、その後、麓に城下町を開いたことから始まりました。嘉明は築城に際し、城下町を洪水から防御するため、湯山川（現・石手川）を南に付替え外堀とする現在のまちの骨格をつくりました。

城下町は、堀之内・城山の南部を中心に武家屋敷、城山の西に「古町三十町」と呼ばれた町人町（商業地等）が配置されました。その後、町人町が南東へと広がり、下級武士の居住地（一番町～四番町など）周辺に形成されたことで、商業地は南東へと重心が移動し、二の丸三の丸を境に、城下町は西北部の古町と南東部の外側（とがわ）に大きく区分されることになりました。このようにして、外側の小唐人町（大街道）や永町（湊町・銀天街）を中心とした繁華街が幕末にかけて形成されていきました。

松山城下町嘉永図



「松山城下町嘉永図」 出典：松山市史料集第十三巻（嘉永年間：1848～1854）

●路面電車と郊外電車の敷設

明治に入り、廃藩置県により社会構造が大きく変動するなか、明治21年、松山―三津間に、蒸気機関車の牽引鉄道として、伊予鉄道が開通します。この四国初の鉄道、全国初の軽便鉄道の整備を契機に現在の松山市駅が交通の結節点となり、外側地区に都市機能がより集中するようになりました。その後、明治28年には道後温泉への温泉浴客の輸送を目的として、三津浜―道後、松山―道後（道後鉄道）が開通し、市街地と道後地区が鉄道でつながることにより、まちがさらに広がっていきました。

改正 松山街図 明治四四年版



「松山市街図明治四四年版」 出典：松山市史料集第十三巻

●戦後から今

昭和 20 年 7 月、第二次世界大戦の空襲により、市内全戸数の半数以上の家屋が罹災し、城山を含む旧市街の大部分が焼失しました。その後の戦災復興土地区画整理事業（昭和 21～39 年）では、現在の都心を中心とした約 350ha の市街地が整備されますが、戦前の道路構成を基本とした道路拡幅を中心に整備されたため、碁盤の目状の城下町らしい町割を残した市街地が形成されています。



「松山市街図昭和二三年版」 出典：松山市史料集第十三巻

四国の核都市として、平成 17 年には周辺の個性あふれる風土や、文化を持つ北条市、島しょ部である中島町と合併し、四国で初めての 50 万都市となりました。

2 松山市における行政の取組

松山市ではこれまで戦災復興に伴う幹線道路等の整備に加え、観光の拠点となっている道後温泉や松山城周辺を中心に景観整備等を実施してきました。

道後においては、道後温泉駅周辺や道後温泉本館周辺において、道路の付替えを伴う歩行者専用空間の整備や舗装の改修、無電柱化や趣のある照明の設置等、街路空間の整備事業を実施し、観光客等が滞留できる空間や安全・安心に通行できる空間が確保されたことにより、回遊性が向上し、温泉街の活性化に貢献しています。



道後温泉駅前整備前後の状況（左：整備前、右：整備後）

松山城への入口であるロープウェー街周辺では、道路空間を再配分し、歩行者等が安全・安心に楽しく通行できる街路空間の整備事業と、無電柱化や店舗のファサード整備、レンガ敷の歩道整備や趣のある照明の設置等、景観形成に関する事業を一体的に実施しました。

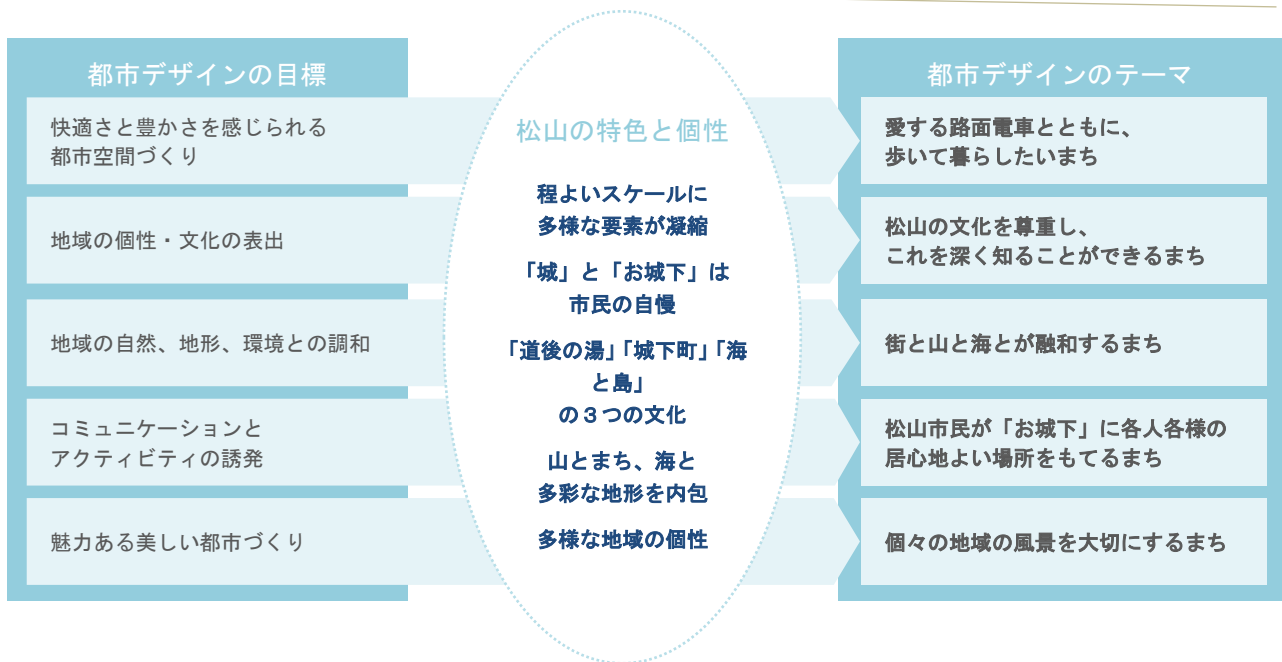


ロープウェー街整備前後の状況（左：整備前、右：整備後）

整備に対する市民の評価も高く、周辺ではカフェ等の飲食店等、おしゃれな店舗も多数立地するなど、商店街の活性化に寄与しています。アーケードがある商店街エリアとは異なった雰囲気づくりに成功しており、地域ブランドの形成に効果をあげています。

また、松山の骨格となる主要な道路空間については、無電柱化や照明や街路樹等の整備を行うほか、近年では、道路空間の再配分による歩行者空間等の充実に関する社会実験を実施するなど、魅力ある都市空間創造のための環境整備を実施しています。

第3章 都市デザインの目標とテーマ



1 都市デザインの目標

快適さと豊かさを感じられる都市空間づくり

—そこに暮らし、活動していて、快適で豊かであると実感できるような都市空間をつくること。

都市は、そこで暮らしたり、働いたり、訪れたりと生活をする人が人間的な住みよさや居心地の良さを感じることのできる空間であるべきです。

利便性が高く効率的でなくても、すべての人が豊かな生活を実感し、各々に居心地の良い場所やお気に入りの場所を見つけることのできるような都市空間をつくることを目指します。



地域の個性・文化の表出

—地域の人々の誇れる独自の個性や文化が育ち、継承され、発展していくこと。

様々な地域で構成されているとても豊かな地域性を持つ都市、それぞれの地域に息づく独自の個性や文化などの地域の資源に目を向け、新たな発想や活力を取り入れながら自らの手で育てることで新陳代謝を繰り返し、次世代へと大切に紡いでいくことのできる誇れる地域・文化をつくることを目指します。



地域の自然、地形、環境との調和

—地域の気象条件や地形的な特質になじみ、省資源・省エネルギーで環境との親和性の高い都市とすること。

松山のまちは、温暖な気候や豊かな資源を生み出す海や山に囲まれた地形など、豊かな環境を背景に成立しています。その自然的特質に合い、これからの都市の継続性・持続性を支えることのできる、省資源・省エネルギーで環境との親和性の高い都市を目指します。



コミュニケーションとアクティビティ^{*1}の誘発

—多種多様なコミュニケーションと活発な都市活動が行われる都市をつくること。

様々なヒトやモノ、コトが様々なシーンで出会い、互いに影響しあい、新しい発想や価値観をつくることのできる、活発で多様性を尊重した都市活動が行われる舞台としての都市をつくることを目指します。



魅力ある美しい都市づくり

—調和のとれた美しい景観によって魅了し、深い印象を与えるような都市空間であること。

豊かな自然や独自の地域文化が作りだす景観や、そこで人々が日々織りなす生活景としての景観によって人々を魅了し、記憶の奥に深く刻まれるドラマティックなシーンを生み出すことのできる都市空間を目指します。



*1 アクティビティ：活気、活動。都市デザインの分野においては、人々が活発に都市で活動することを意味する

2 松山の特色と個性

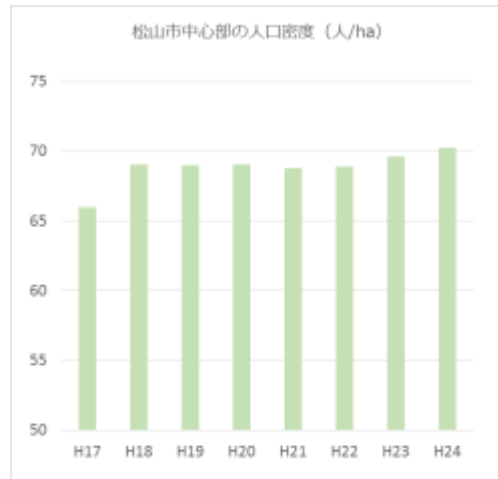
ほどよいスケールに多様な要素が凝縮

まち

- ・ 2km 四方、歩けるようなスケールに行政、業務、商業、歴史、文化等が集積しています。
- ・ 中心市街地の居住人口の密度も 70 人/ha に近く高い水準を示しています。



出典：松山市中心市街地活性化基本計画を基に作成

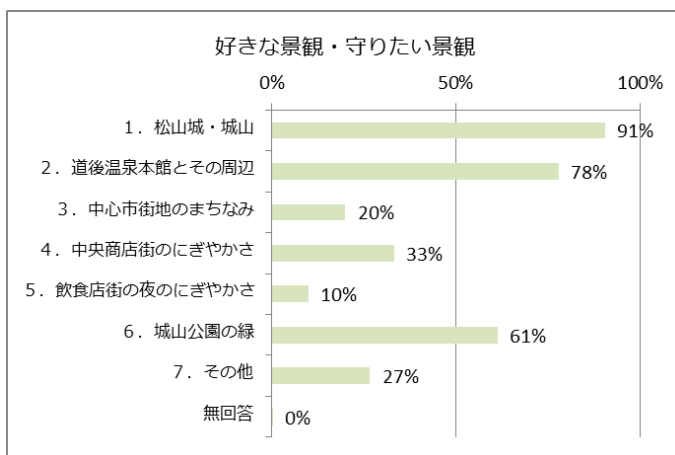


出典：松山市住民基本台帳

「城」と「お城下」は市民の自慢

誇り

- ・ 松山城は、まちのイメージと人々の記憶に深く根つき、市民の心に格別の存在感を持っています。
- ・ 松山には「お城下へ行く」という言葉があり、それは華やかな場所へのお出かけを意味します。「お城下」は今も人々のハレの場となっています。



出典：松山市景観に関する意識調査（H24 実施）



「道後の湯」「城下町」「海と島」の3つの文化

文化

- ・3000年の歴史があると言われ、日本書紀にも登場する温泉。加藤嘉明の城下町形成に端を発するお城下。多島で構成される瀬戸内独自の文化を受けつぐ島。それぞれに系譜の異なる複数の文化を受け継ぐ都市です。



出典：坂の上の雲ミュージアム HP いにしえマップ

山とまち、海と多彩な地形を内包

自然・地形

- ・日本の里山が凝縮されているといわれる四国。四国最大の都市松山は、手の届くような範囲に急峻な山地から市街地、海まで多彩な要素を内包する環境にあります。



イメージ図作成：ハーツ環境デザイン

多様な地域の個性

地域

- ・松山の中でも、漁業や商業で栄えた港町である三津の他にも、合併により北条や中島も加わり、地域に多様な個性をもつ多数の地域があります。



3 都市デザインのテーマ

都市デザインのテーマ、それは、松山の特色や個性を生かしながら、都市空間という魅力ある舞台で、市民がいきいきと暮らし活動するような風景をつくりだしていくこと。

愛する路面電車とともに、歩いて暮らしたいまち

松山のイメージは、「穏やかで優しく、あたたかい」まち。自動車に頼らなくてもコトコトと走る路面電車をスニーカーのように使いこなしながら、自分らしい暮らしを楽しめるー歩いて暮らせるだけではなく、歩いて暮らしたくなるまちをデザインします。



松山の文化を尊重し、これを深く知ることができるまち

道後温泉、松山城、お城下、文学、港、島など、松山に生まれ育った文化を尊重することをデザインの基底にすえ、触れるほどに、また、訪れるほどに、ゆっくりと深い理解へとつながるような風土を感じられるまちをデザインします。



街と山と海とが融和するまち

景観やまちの様々な要素から、まちなかにいても、山や海などの自然が、すぐ手の届くところにある豊かさを実感できるまちをデザインします。



松山市民が「お城下」に各人各様の居心地よい場所をもてるまち

松山の人たちがまちなか=「お城下」に求めるのは、買い物や食事を楽しめることだけではありません。子どもたちが発表したり、中高生が集まって勉強したり、一人でふらりと訪れても、本を読んだりくつろいだり、各人各様のニーズを満たす、心地よい居場所を公共空間の中にもてるまちなかをデザインします。



個々の地域の風景を大切にするまち

松山城を中心にまちが構成されている中心市街地、情緒ある佇まいが港町の歴史への想像をかきたてる三津、「お城下」の形成以前からの歴史があり、風光明媚な海と島の魅力で人々を引き寄せる北条・鹿島など、松山の中には、それぞれに個性が違うたくさんの地域があります。それぞれの地域や場所の歴史性や本質を大事にした景観をデザインします。

